

近藤朔風とその訳詞曲再考

坂本 麻実子

（1996年10月21日受理）

KONDŌ SAKUFŪ and the Foreign Songs he translated into Japanese

SAKAMOTO Mamiko

はじめに

日本には、「訳詞曲」と呼ばれ、外国歌曲－主として西洋歌曲を日本語訳で歌う曲種がある。しかし、西洋の民謡、芸術歌曲、オペラのアリアや合唱は、日本では、プロの音楽家は原語で歌うのを原則としており、これらのジャンルの訳詞曲は大衆向けの愛唱歌として広まった。現在では、訳詞曲の文語体の歌詞は古めかしく感じられるが、西洋歌曲を日本語の歌詞で歌うことは、古くは賛美歌から最近のポピュラーソングに至るまで、時代やジャンルを越えてくり返し見られ、日本人の西洋音楽受容の一つのスタイルになっている。西洋歌曲を日本人に親しめる歌にしたという点で、訳詞家の仕事は西洋音楽受容史の重要な検討課題と考える。ところが、従来、訳詞家は、西洋音楽のオリジナルを扱うのではないためか、演奏家や作曲家や音楽教育家に比べて顧みられていない。本稿で取り上げる訳詞家、近藤朔風（本名逸五郎。1880-1915）も、音楽界や文学界で忘れられているわけではないが⁽¹⁾、朔風はどのような人生を送ったのか、訳詞曲はどれくらいあるのかなど、人物や仕事の全体像は意外と知られていない。しかし、朔風の名は知らなくても、朔風の訳詞によるシュベルトやウェルナーの「のぼら」（童は見たり、野中のぼら）やジルヒャーの「ローレイ」（なじかは知らねど心わびて）の歌は、日本人なら一度は耳にしているだろう。それぐらい朔風の訳詞曲は定着しているが、現実には朔風の訳詞曲は歌

われていても、訳詞家の朔風のことは関心が及びにくい。その朔風を音楽史の上で問題にする場合、まず、訳詞家の仕事も日本語を介した西洋音楽受容だと認識することから始めたい。そして、朔風の個々の訳詞曲の原詞と訳詞を対照し、彼の翻訳の手法や質を検討するのも大事であるが⁽²⁾、本稿は、今までの通りいっぺんの解説で片づけられていた朔風の人物と訳詞曲に関して改めて調査を行ない、朔風が訳詞家として音楽界に身を置いた経緯と、朔風が訳詞を通じて日本に紹介した西洋音楽とはどのようなものかを明らかにしたい。

ところで、『音楽界』第161号（大正4年3月号）は、巻末付録で、「故近藤逸五郎君哀悼録」と題して12頁わたって朔風の追悼特集をしている。『音楽界』は、後述するように、朔風の主要な訳詞曲の発表の場となった音楽雑誌であり、近年、復刻された⁽³⁾。追悼特集の執筆者は、朔風の交友関係を知る手がかりになるが、山本正夫（『音楽界』主筆）、乙骨三郎（音楽学者）、前田林外（詩人。『白百合』主宰）、小松耕輔（玉巖。作曲家）、福井直秋（音楽教育家。武蔵野音楽学校－現武蔵野音楽大学創立者）、近藤千穂子（朔風の妻）、以上6人である⁽⁴⁾。『音楽界』の追悼特集は、朔風の人物や仕事について興味深い情報を提供するが、なお調査を要する点も多いので、以下、朔風の人生と音楽とのかかわりを再構成していく。

1. 生い立ち

近藤朔風は、明治13年(1880)2月14日に東京で生まれた。ただし、事典類(注1参照)には記されていないが、近藤とは養子先の姓で、実は系図に示すように、桜井勉(幼名熊一、号は兒山)、八重子の第5子である。桜井家⁽⁵⁾は、旧出石藩(兵庫県出石郡)の儒者の家系で、藩政にも関与した。明治維新後、勉は上京して官吏となり、朔風が生まれたときは、内務省の山林局長であった⁽⁶⁾。勉は能吏だったが、藩閥外の小藩出身のため、多難な役人生活であった。しかし、勉は桜井家および東京における出石出身者のかなめであった。『音楽界』主筆の山本正夫も出石生まれで、山本の追悼文によれば明治29年に上京して勉を訪ね、「桜井の逸ちゃん」こと朔風と出会ったという。

朔風の実母八重子は、勉の2度目の妻で、明治22年4月1日に病死した。朔風は明治26年(1893)2月10日付で、近藤軌四郎の養子となる(14歳)⁽⁷⁾。近藤家は、勉の末弟熊三の養子先で、熊三の死後、勉は都築家から迎えた軌四郎に継がせた。朔風の母と軌四郎の妻は姉妹だったので、近藤家は、朔風には父方からいっても母方からいっても叔父の家だった。

勉の次弟熊二は、公刊された日記(『木村熊二日記』⁽⁸⁾)によると朔風を可愛がり、朔風の交際関係も熊二を介して興味深い広がりを見せる。熊二は、幕臣木村家の養子となり、同じ幕臣の田口

家から鏡子(経済学者田口卯吉の姉)を妻に迎えた。また、熊二は乙骨太郎乙とは幕臣同士終生親しく、太郎乙3男で音楽学者の三郎は、朔風とは少年時代からの友で、やがて訳詞の仲間となる。徳川家臣である熊二は幕末には官軍と戦って新政府に追跡され、明治3年に渡米し、キリスト教宣教師となって15年に帰国した。その後、熊二は作家の島崎藤村を信仰に導くなど伝道のかたわら教育に携わり、明治18年に鏡子とともに明治女学校を、26年には小諸義塾を創設した。特に、明治女学校は女子教育の先駆であり、『女学雑誌』の創刊によって近代文学に大きく貢献したが⁽⁹⁾、明治34年(1901)に創刊された音楽雑誌『音楽之友』主筆の巖本捷治は明治女学校の教師であり⁽¹⁰⁾、音楽における明治女学校の役割も今後検討を要するだろう。後述するように、『音楽之友』を通じて、朔風は音楽ジャーナリズムの世界にはいっていく。『音楽之友』は明治37年(1904)に『音楽』と改題、朔風は編集主任となるが、『音楽』には熊二の3度目の妻隆子の弟でヴァイオリニスト東儀哲三郎も一時期加わっていた。また、朔風の妻となる日下部千穂も明治女学校に学んでいる。

こうして、朔風は旧出石藩の人々と旧幕臣たちと繋がりつつ、東京で官吏の息子として育った。朔風は、明治28年(1895)に本郷区(現在文京区)の誠之小学校⁽¹¹⁾から、郁文館中学校(当時は私立尋常中学郁文館)に入学し(16歳)、33年(1900)に卒業した⁽¹²⁾(21歳)。

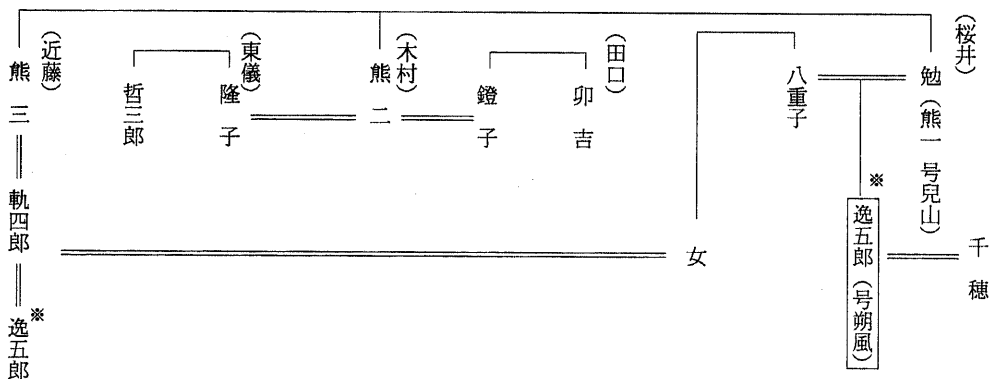


図1 近藤朔風関係系図

乙骨の追悼文によると、朔風は軍艦を描くのが上手な男の子だったが、中学卒業頃から音楽好きになったという。朔風が夢中になったのは、クラシック音楽—特に明治30年代の文化人を熱狂させたワーグナー⁽¹³⁾であり、朔風も音楽家を夢見るようになる。山本正夫はすでに明治32年に東京音楽学校予科に入学していたし、師範科生の福井直秋とも親しくなっていた朔風は、明治34年(1901)9月、東京音楽学校の選科生(科目履修生)になった(22歳)。当時、山本は本科器楽部2年生、福井は甲種師範科3年生で、朔風も遅ればせながら音楽の勉強を始めた。

2. 東京音楽学校選科生

東京音楽学校での朔風は、唱歌とピアノの選科生として、明治34年度、35年度、36年度の在籍が確認できる⁽¹⁴⁾。ただし、選科生は、上野の校舎ではなくて、一橋の分教場に通って授業を受ける。その一方、朔風は、音楽には反対の父親の手前、明治35年(1902)9月に東京外国語学校本科伊語学科に入学し(23歳)、翌36年10月まで在籍した⁽¹⁵⁾。東京音楽学校は、もちろん外国語の専門教育機関だが、各国の喜劇台詞や音楽を演じる催しもあった⁽¹⁶⁾。音楽青年の朔風が、英語やドイツ語ではなく、イタリア語科に籍を置いたのは、オペラへの関心が一つの要因であろう。したがって、明治35年9月から36年10月までは、朔風は東京音楽学校と東京外国語学校の両校に在籍していたことになる。しかし、念願の音楽学校で、朔風ははたして自分の居場所を見つけられたであろうか。

実は、朔風の声は声楽家や音楽教師に向いていなかった。追悼特集でも、山本正夫、小松耕輔、前田林外の3人が朔風の声に言及しているほどで、要するに、朔風の声は朗々と響くバリトンではなく、20歳もとうに過ぎているのに女のようにかん高く、しかも妙に震えを帯びた声で、「西洋音楽の女形」(山本)と揶揄されていた。その一種異様な声で、朔風が熱に浮かされたようにワーグナーを歌うのを小松は聞いたというが、耳に心地よいものではなかったろう。

歌声に恵まれない朔風が東京音楽学校で存在を

示すのは、東京外国語学校の語学力を買われて、明治36年(1903)7月23日、歌劇研究会によるグルックの「オルフォイス」の日本語上演にかかわったときであった(24歳)。この日本人による最初のオペラで朔風が石倉小三郎、乙骨三郎、吉田豊吉とともに台本を翻訳したことは知られているが⁽¹⁷⁾、山本と小松の追悼文によって付け加えると、朔風が翻訳する話は、最初から決まっていたのではない。選科生の朔風は、歌劇研究会の部屋に東京外国語学校の制服姿で出入りして歌ったりしていたが、6月の音校の卒業試験の時期ながらも翻訳ができなくて頼まれたらしい。しかし、一度引き受けると、朔風は翻訳完了に力を貸しただけでなく、舞台設営のために画家たちとの折衝にあたったという。

「オルフォイス」上演と同時に、翻訳台本も解説をつけて『歌劇オルフォイス』と題して出版された。(明治36年7月 東文館 東京。表紙は歌劇研究会誌となっているが、奥付の編者は「近藤逸五郎」になっている。)それを機に、朔風は東京音楽学校からも東京外国語学校からも離れ、音楽雑誌に寄稿するようになる。

3. 音楽ジャーナリズム業界へ

明治36年8月、『歌劇オルフォイス』出版の翌月であるが、朔風は『音楽之友』に「トリスタン、ウント、イソルデ」と題してワーグナーのオペラ解説を書いた(第4巻第4号～第5巻第2号5回連載 明治36年8月～12月)。ここで朔風は本名の「近藤逸五郎」とともに「羌村」という筆名も使った。以後、明治40年にかけて、朔風は『音楽之友』→『音楽』(楽友社)、『太陽』(博文館)、『白百合』(東京純文社)、『音楽新報』(音楽新報社)の諸誌に寄稿した。特に、『音楽』では『音楽之友』時代の巖本捷治に代わって主筆になった山本正夫を助けて、第7巻第6号(明治38年4月)から編集主任となった。

しかし、朔風は最初から訳詞家ではなかった。朔風はさまざまな音楽記事を書いている。「希伯来劇『雅歌』」(『白百合』第2巻第1号 明治37年11月)、「器楽発展の経路」(『音楽之友』第7巻第

5号 明治38年2月),「古代の希伯来音楽」(『音楽』第8巻第1号 明治38年5月),「悲喜劇シラノドベルシュラック」(同前),「音楽辞書」(『音楽』第8巻第5号~第9巻第4号 明治38年9月~明治39年2月),「音楽組織学」(『音楽』第10巻第4~5号 明治39年8月~9月),「西欧音楽の手ほどき」(『音楽』第10巻第6号 明治39年10月)などであるが,最も力を入れたのがワーグナーの啓蒙記事であった。小松の追悼文では,朔風は音楽学校時代からワーグナーに関する書物や楽譜を収集していたというが,その蓄積が音楽ジャーナリズムの世界で活かされ,前述の「トリスタン, ウント, イソルデ」から,「歌劇タンホイゼル」(『太陽』第10巻第13号 明治37年10月),「『タンホイゼル』に就いて」(『白百合』第2巻第4号 明治38年2月),「トリスタンとイソルデの音楽」(『音楽』第8巻第1号 明治38年5月),「タンホイゼル」(同前),「リヒャルト・ワグネル」(『音楽』第10巻第4号~第5号2回連載。吉田白甲と共編 明治39年8月~9月),「歌劇タンホイゼル」(『音楽』第12巻第3号 明治40年7月)と続く。また,『白百合』には,朔風が提供した「タンホイゼル」と「ローエングリン」の挿絵も掲載されている(第2巻第3号,第3巻第2号 明治38年1月,12月)。

しかし,熱狂的なワグネリアンだけであったのなら,朔風は今日では忘れられてしまったであろう⁽¹⁸⁾。その意味で注目したいのが,ワーグナー記事の合間に,「近藤あきら」の筆名で『音楽』に発表されたグノーの「セレナアデ」(第8巻第1号 明治38年5月),シューベルトの「ねむれねむれ」(第8巻第3号 明治38年8月)の2つの訳詞曲で,朔風の訳詞家としての出発はひそやかなものであった。

なお,『白百合』には,朔風は日本民謡の収集という今まで知られていなかった仕事を発表している。前田林外主宰の『白百合』は,ワーグナー記事も載せたが,今日の文学史では明治39年から40年にかけて民謡特集を組んで人々の関心を促した点に注目している⁽¹⁹⁾。林外は,『白百合』第3巻第12号(明治39年10月)社告で,全国の誌友に民謡の情報提供を呼びかけるとともに,「近藤逸五郎君は東奥滞在中に辛苦集輯されしもの(筆者

注。民謡)を清書せしめて一冊子となして特に寄贈されたり。」と述べている。朔風編纂の民謡集の実態は不明だが,恐らく,林外への寄贈本の一部が,『白百合』に掲載された羽前庄内の「潮来ぶし」(第4巻第1号 明治39年11月)と,越後柏崎の「さんがい節」(第4巻第5号 明治40年3月)であろう。前者には「近藤氏が全地にてとられし譜をきゝて」という添え書きがあり,朔風は民謡の採譜をしたらしい。なお,林外の追悼文によれば,朔風は例の「西洋音楽の女形」の声で「潮来ぶし」を聞かせたという。

それにしても,東京育ちの朔風は,なぜ「東奥」に出かけたのだろうか。林外は追悼文で,山形県鶴岡町(現在鶴岡市)から朔風の手紙をもらったと言っているが,筆者は,朔風と民謡を結びつけるのは,鶴岡で音楽教員をしていた日下部千穂という女性ではないかと考える。筆者の調査では,千穂は朔風より4歳下で,明治17年4月12日に桜井家の故郷出石町で生まれ⁽²⁰⁾,朔風の叔父夫婦が設立した明治女学校を経て,明治35年4月に東京音楽学校甲種師範科に入学(同期に訳詞家の犬童球溪がいる),38年3月に卒業し,4月に山形県立鶴岡高等女学校に赴任した。朔風と千穂がいつ出会ったのかは不明だが,千穂は出石,明治女学校,東京音楽学校と,朔風と近いところにいた。そして,明治39年9月に近藤姓となっている⁽²¹⁾。千穂の改姓は,朔風との結婚届を出したためだろう。そして,林外が朔風から民謡集を寄贈されたと言っているのが『白百合』明治39年10月号なので,朔風は,千穂の住む鶴岡を足場に,庄内,越後と雪国の民謡を収集したのではないかと。なお,近藤千穂は明治42年6月に栃木女子師範学校,大正2年に東京府立第四高等女学校に転任し,「近藤千穂子」,あるいは単に「千穂子」の筆名で『音楽界』に寄稿するようになった。朔風と民謡とのかかわりも,千穂の鶴岡高女在職時代で終わっている。

4. 訳詞曲の発表と出版

管見にはいった限りでは,朔風の訳詞曲は,前述のように明治38年(1905)の「近藤あきら」の筆

名による「セレナアデ」と「ねむれねむれ」が最も早い(26歳)。「朔風」の筆名が使われるのは、明治40年(1907)に『音楽新報』に発表したウェーバーの「ふなうた」からである(28歳)。「朔風」とは北風を意味し、冬の季語である。朔風の訳詞業が本格化するのも明治40年頃からで、明治40年には朔風は如山堂書店から「独唱・合唱西欧名曲」というピースもののシリーズを出すとともに(発売開始の時期は不明)、6月には初の訳詞曲集『独唱名曲集』を編集、出版した。明治41年(29歳)には、『音楽』と『音楽新報』が合併して新雑誌『音楽界』が楽界社から創刊されるが、『音楽界』には、朔風はもっぱら訳詞曲を、明治41年(1908)から36歳で没する大正4年(1915)まで、断続的に発表した。そして、世間的にも、朔風は訳詞家と見なされるようになる。朔風は、明治42年(30歳)には、9月に出版された小松玉巖(耕輔)編『名曲新集』(大倉書店)に訳詞曲を提供し、11月に天谷秀との共編で『女声唱歌』(共益商社書店)を出版した。明治44年(32歳)には、山本正夫との共編で『西欧名曲集』(楽界社)を出版した。これらの訳詞曲集には、『音楽界』で発表した訳詞曲を、そのまま、あるいはタイトルを変更したり、訳詞を一部手直しして収録することが多い。大正3年(35歳)には、朔風は山本正夫と組んで楽界社から「西欧名曲叢書」というシリーズを出したが(『音楽界』第149号、第150号広告による。大正3年3、4月)、残念ながら未見である。

以下、平成8年(1996)10月現在で調査した朔風の訳詞曲年表をあげる。①は作曲者、②は作詞者、③は原曲タイトル、④は発表先、⑤は訳詞の歌いだし、⑥は備考を記す。

近藤朔風訳詞曲年表

I. 朔風没年までの出版物から確認した訳詞曲 40曲

明治36年(1903)24歳

7月 『歌劇オルフォイス』

- ①Gluck ②Calzabigi ③Olfeo ④東文館
⑥歌劇研究会(石倉小三郎、乙骨三郎、
吉田豊吉、近藤逸五郎)訳

明治38年(1905)26歳

5月 セレナアデ

- ①Gounod ②Hugo ③Serenade ④音楽第
8巻第1号⑤夜ごとわがむねにうたひし
⑥筆名「近藤あきら」

8月 ねむれねむれ

- ①Schubert ②Claudius ③Wiegenlied D.
498 ④音楽第8巻第3号 ⑤ねむれ、ねむれ、
母の胸に、ねむれ、ねむれ、母の腕に ⑥筆名
「近藤あきら」

明治40年(1907)28歳

2月 ふなうた

- ①Weber ②Wieland ③O wie wogt es sich
schön auf der Flut(Oberon) ④音楽新報
第4巻第2号 ⑤八重の潮溜、漂ふふなびと

6月 『独唱名曲集』近藤逸五郎編

- ④如山堂書店 ⑥朔風訳詞曲は全15曲中10
曲

- (1)こだま ①Gluck ②Calzabigi ③Chiamo
il mio ben così (Olfeo) ④思いわびつ、吾
はさまよふ
(2)霊異 ①Beethoven ②Gellert ③Der Ehre
Gottes aus der Natur op.48-4 ⑤莊嚴(はつか)
の神のみわざ
(3)ふなうた ①Weber ②Wieland ③O wie
wogt es sich schön auf der Flut (Oberon)
⑤金色の帳おりたち、そよかぜ吹くたそが
れ ⑥明治40年2月「ふなうた」とは別訳
(4)子守歌 ①Schubert ②Claudius ③Wiegen-
lied D.498 ⑤ねむれ、ねむれ、めぐしわらべ
⑥明治38年「ねむれねむれ」とは別訳
(5)わかれ ①Mendelssohn ②Feuchtersleben
③Volkslied op.47-4 ⑤運命(はつか)と思へど、
わが君と
(6)わすれな草 ①Schumann ②Heine ③Aus
mainen Tränen spriessen (Dichterliebe)
op.48-2 ⑤思(はつか)しのびて、朝な夕な
(7)花かそもなれ ①Liszt ②Heine ③Du bist
wie eine Blume ⑤花かそもなれ、清きすが
た
(8)宵星 ①Wagner ②Wagner ③Wie Todes-
ahnung(Tannhäuser) ⑤死の影の襲ふが

ごと

(9)夜の調 ①Gounod ②Hugo ③Sérénade
⑤あはれゆかしき歌の調べ ⑥明治38年「セ
レナアデ」とは別訳

(10)『ジオスラン』の子守歌 ①Godard
②Lamartine ③Berceuse (Jocelyn) ⑤惨
き運命(はだか)身に天降(あ)りて

8月 つはもの(独唱・合唱西欧名曲第3巻)
①Silcher ②Chamisso ③Der Soldat
④如山堂書店 ⑤あはれ侘し喇叭の音 ⑥未
見だが「つはもの」以前の独唱・合唱西欧名
曲既刊は次のとおり。

子もり歌(Schubert)

さらば(Schubert)

流浪の民(Schumann)

少女の願(Chopin)

野薔薇の花(Schubert いわゆるシューベ
ルトの「のぼら」か?)

わかれ(Mendelssohn)

明治41年(1908)29歳

2月 ロオレライ

①Silcher ②Heine ③Loreley ④音楽界2
月号 ⑤なじかは知らねど、心わびて

明治42年(1909)30歳

1月 花乙女

①Schumann ②Heine ③Du bist wie eine
Blume(Myethen)op.25-24 ④音楽界1月
号 ⑤花にもまごう、美(は)し姿

2月 乙女のねがひ

①Chopin(ポーランド民謡) ③Mädchens
Wunsch op.74-1 ④音楽界2月号 ⑤わが
世しも、ままにならば

2月 船路

①Mendelssohn ②Heine ③Wasserfahrt
op.50-4 ④音楽界2月号 ⑤浪路はるかに、
市街(は)かすみて

3月 海のしつけさ

①Schubert ②Goethe ③Meers Stille D.
216 ④音楽界3月号 ④溟滓(く)る静寂

3月 わかみどり

①Schumann ②Kerner ③Erstes grün op.
35-4 ④音楽界3月号 ⑤春風吹きそめ、梢

は萌みて

5月 菩提樹

①Schubert ②Müller ③Der Lindenbaum
(Winterreise)D.911-5 ④音楽界5月号
⑤ながれにそひて、繁る菩提樹

6月 たゆたふ小舟

①Knight ②不明 ③Rocked in the Cradle
of the Deep ④音楽界6月号 ⑤たゆた(は)
ふ小舟にみ力たよりて

6月 夜の歌

①Kuhlau ②Goethe ③Abendlied ④音楽
界6月号 ④巔(は)くれゆき

7月 草笛

①スウェーデン民謡 ④音楽界7月号 ⑤遥
小(は)に距(は)たる、面影しのびつ

9月 『名曲新集』小松玉巖編

③大倉書店 ⑥朔風訳詞曲は全25曲中9曲。
(1)~(6)独唱曲。(7)~(9)合唱曲。

(1)海の静寂→明治42年6月 海のしつけさ

(2)菩提樹→明治42年5月 ⑤泉にそひて

(3)花をとめ→明治42年1月 花乙女

(4)たゆたふ小舟→明治42年6月

(5)乙女のねがひ→明治42年2月

(6)終焉 ①Schubert ただし疑問 ②ブランシュ
原綴不明 ③Adieu! ⑤臨終(は)のときは、近
づきぬ

(7)舟路→明治42年2月 船路

(8)夜の歌→明治42年6月

(9)草笛→明治42年7月

11月 『女聲唱歌』天谷秀、近藤逸五郎編

④共益商社書店 ⑥全25曲三部合唱曲。う
ち朔風訳詞曲14曲

(1)汝がとも ①ハンガリー民謡 ⑤夢になづ
みて、眠る愛児

(2)野中の薔薇 ①Werner ②Goethe
③Heidenröslein ⑤童は見たり、野なかの
薔薇 ⑥いわゆるウェルナーの「のぼら」

(3)胸のたゞなか→明治40年8月 つはもの

(4)黄昏→明治42年6月 夜の歌

(5)花の少女 ①Mendelssohn ②Heine

③Abendlied 作品番号なし ⑤音なく暮るる、春
の夕べ

- (6)新緑→明治42年3月 わかみどり
 (7)牧童→明治42年7月 草笛
 (8)菩提樹→明治42年5月
 (9)別離 ①Abt ②不明 ③Wenn die Schwallen
 heimwärts zieh'n ⑤南はるかに、燕はかへり
 (10)美し夢→明治40年6月 子守歌
 (11)神殿 ①Kreutzer ②Breitenstein ③Die
 Kapelle ⑤宵星、遠(はつ)の空に
 (12)ロオレイ→明治41年2月
 (13)稜威(みいつ)→明治40年6月 霊異
 (14)つむぎうた ①Wagner ②Wagner
 ③Spinnerchor(Der fliegende Holländer)
 ⑤くるくる廻るは、糸くる車
 明治43年(1910)31歳
 12月 黒かげ
 ①ロシア民謡 ④音楽界12月号 ⑤嵐吹き荒
 (は)びて、波の音たかく
 明治44年(1911)32歳
 1月 蓮の花
 ①Schumann ②Heine ③Die Lotosblume
 (Myrthen) op.25-7 ④音楽界1月号 ⑤日盛
 しぼめる、蓮(はつ)の花
 4月 『西欧名曲集』近藤逸五郎、山本正夫編
 ③楽界社 ⑥全15曲合唱曲。うち朔風訳詞
 曲8曲
 (1)黄昏→明治42年11月
 (2)折薔薇→明治42年11月 野中の薔薇
 訳詞は一部異なる。
 (3)ロオレイ→明治41年2月
 (4)神殿→明治42年11月
 (5)牧童→明治42年7月 草笛
 (6)別離→明治42年11月
 (7)船路 ①Mendelssohn ②Heine ④Wasser-
 fahrt 作品番号なし ⑤船端(はかり)に佇み、見返るな
 ぎさ
 (8)花の少女→明治42年11月
 6月 暗路
 ①Schumann ②Uhland ③Der Traum
 op.146-3 ④音楽界6月号 ⑤おぐらき夜半
 を、ひとりゆけば ⑥現在歌われるライトン
 Wrightonの旋律でいつ発表されたのかは

- 不明。
 大正2年(1913)34歳
 1月 愛の快樂
 ①Martini ②不明 ③Plaisir d'amour
 ④音楽界1月号 ⑤歓楽(はれ)の夢と消えて
 ⑥目次の訳詞者は近藤千穂子になっている。
 大正3年(1914)35歳
 3月 願いごと
 ①Mendelssohn ②Heine ③Entflieh mit
 mir op.41-2 ④音楽界3月号 ⑤いざ手に
 手をとる
 3月 『西欧名曲叢書』開始。近藤朔風、山本
 正夫編 楽界社(～12月)㊦
 大正4年(1915)36歳
 3月 とく帰れ
 ①Rocke ②不明 ③Wilt thou soon return?
 ④音楽界3月号 ⑤都さして君は去り
 4月 歌の翼
 ①Mendelssohn ②Heine ③Auf Flügeln
 des Gesanges op.34-2 ④音楽界4月号
 ⑤歌の翼に、乗せて行かな ⑥乙骨の追悼文
 では朔風の絶筆という。
 ㊦『西欧名曲叢書』の内容は次のとおり。()内
 は作曲者。
 第1集「メンデルスゾーン号」大正3年3月
 うぐひす、ひばり、さくら草、歌の翼。
 第2集「女声三部合唱号」大正3年4月
 春の進行(シューベルト)、水夫の歌(ワーグナー)、夜(シューベルト)、夕の鐘(アプト)、
 掛け指輪(グルック)、救世の神(モーツァルト)。
 第3集「歌劇劇唱曲号」大正3年5月
 宵星(ワーグナー)、嗟嘆の曲(グルック)、子守歌(ゴダール)。
 第4集「高名民謡号」大正3年6月
 森の小鳥、牧童、紅帽子、眠れ子守歌、サンターレスア、めで人。
 第5集「ベートーヴェン号」大正3年7月
 さつきの歌、愛のうた、稜威。
 第6集「シューベルト号」大正3年8月
 海のしげさ、シルヴィア、ながれながれて。
 第7集「シューマン号」大正3年9月
 月光、流涙の民、はちす。
 第8集「英国民謡号」大正3年10月
 たゆたふ小舟、ホームスウィートホーム、スコットランドの送別の歌、ひとり残りし夏のぼろ。

第9集「芸術的歌謡曲号」大正3年11月

歌の曲(アーン)、かどづけ(グノー)、アヴェマリア(グノー)、花の少女(リスト)。

第10集「近代作家歌曲号」大正3年12月

内容不明

以上、「音楽界」第149号、第150号広告による。大正3年3月、4月

II. 朔風没後の出版物から確認した訳詞曲 7曲

(1)久しき昔 ①Bayly ②不明 ③Long, Long ago ⑤語れめでしまごころ ⑥月刊楽譜大正5年2月号掲載

(2)野路 ①Reichardt ②Goethe ③Jungers' Abendlied ⑤思ひしづみて、野路ゆけば ⑥月刊楽譜大正5年6月号掲載

(3)戦友 ①②ドイツ民謡 ⑤世にまたなくも、めでし友と ⑥月刊楽譜大正6年1月号掲載

(4)鶯 ①Mendelssohn ②Goethe ③Die Nachtigal op.59-4 ⑤うぐひすゆけるを、はるまたまねく ⑥『独唱曲と合唱曲101名歌集』(東京音楽書院 1936年)などに所収。初出は大正3年3月西欧名曲叢書「メンデルスゾーン号」所収の「うぐひす」?

(5)春にまつ ①Schubert ②Uhland ③Frühlingsglaube D.686 ⑤春風なよかに、夜昼吹きそめ ⑥『世界名歌110曲集』2(全音楽譜出版社 1958年)所収。初出は大正3年4月西欧名曲叢書「女声三部合唱号」所収の「春の進行」?

(6)暗路 ①Wrighton ②Uhland ③Her bright smile haunts me still ⑤おぐらき夜半を、ひとりゆけば ⑥『世界名歌110曲集』1(全音楽譜出版社 1955年)などに所収。Schumann「夢 Der Traum」の旋律による「暗路」は『音楽界』明治44年6月号に発表

(7)のばら ①Schubert ②Goethe ③Heidenröslein D.257 ⑤童は見たり、野中のばら ⑥『世界名歌110曲集』1(全音楽譜出版社 1955年)などに所収。初出は明治40年8月以前独唱・合唱西欧名曲「野薔薇の花」?

以下、補足すると、山本の弔辞の中に「君(筆者注。朔風)が長からざりし在世中に於て、我楽

界に残せし名著又少なからず。『独唱名曲集』、『西欧名曲集』、『女聲唱歌』等最も世に行はる。其他雑誌『太陽』、『音楽界』、『月刊楽譜』等を始めとし、諸種の新聞雑誌に投稿せる名篇佳什甚だ多し」と朔風の事に言及している部分がある。今回の調査では、朔風が編集した『独唱名曲集』、『西欧名曲集』、『女聲唱歌』はすべて確認できた。その他、小松玉巖編『名曲新集』にも朔風の訳詞曲が収録されていた。また、「独唱・合唱西欧名曲」、『西欧名曲叢書』という訳詞曲のシリーズも出していた。雑誌では、『太陽』にワーグナー論を発表していた。『音楽界』には「ローレライ」を始め14の訳詞曲を確認した。『月刊楽譜』は、現在は散逸が激しく、筆者が調査に行った国立音楽大学附属図書館では、朔風没後の大正5年、6年発行のものに「久しき昔」、「野路」、「戦友」の3曲を確認した。その他、『音楽界』の前身誌である『音楽』や『音楽新報』にも朔風は訳詞曲を発表していた。新聞には、現在までのところ朔風の訳詞曲を見いだしていない。

5. 急逝まで

朔風より遅れて大正時代から訳詞を手がけた堀内敬三は、「歌曲の訳詞は芸術作品ではない。できるだけ忠実に原詞の意味と雰囲気伝えるのは勿論だが、曲の譜割や抑揚に拘束される。クロスワード・パズルを解くように文字を当ててゆく。芸術的というよりは知的な作業である。」⁽²²⁾と述べている。しかし、明治時代の朔風の訳詞には、唱歌にみるように、教育のためとはいえ、平気で原曲とは無関係の歌詞をつけて歌わせる風潮に対する批判があり、朔風は西洋音楽の理解を深め、音楽趣味の向上を図ろうとしていた。

明治40年6月出版の『独唱名曲集』は、朔風が初めて編集した訳詞曲集であるが、当時としては思い切って芸術歌曲のみを選曲し、全曲ピアノ伴奏譜および曲目解説つき、楽譜は二色刷、和田三造、和田英作の協力でも装丁にも凝った。それは、「わが楽界に於て、荘厳なる宗教曲に換ふるに花月の歌を以てし、艶麗なる恋愛曲に教訓の詞を加へて雀みざるが如き、曲意を軽んずる弊を改め、

併て曖昧なる欧楽の流行を杵かむとする」(序文)の目的であった。たとえばウェルナーの「のぼら」は、早起きして勉学を勧める「花鳥」(明治17年『小学唱歌集』第三編 第89曲)として歌っていて構わないのではなく、翻訳上の困難や限界はあっても男の子とばらの花とのドラマを訳して歌ってもらうことこそ、原曲を尊重しつつ、日本人の西洋音楽受容に貢献できるのである。しかし、朔風の意気込みにもかかわらず、当時としては高尚すぎて、「初版五百部を売するのに七年かゝった由で勿論絶版」⁽²³⁾であり、採算はとれなかったようだ。そのせいか、『独唱名曲集』以後、朔風が訳詞曲を出版するときは、単独ではなく、小松玉巖なり、天谷秀なり、山本正夫なり、誰かと組んでいる。

小松の追悼文によれば、明治40年に『名曲新集』編集のため、小松、朔風、小林愛雄、内藤濯の4人が集まると、朔風は「歌が気に入らなければ何遍でも改めた。他の人が好い句など見付け出して、かう直してはどうかなどいふと、非常に喜んで拾ひものでもしたやうに雀躍した。」という。しかし、『音楽界』では、盟友の隔てのなさもあるのだが、山本が主筆の立場から朔風の訳詞にあれこれクレームをつけるので、朔風はついに山本と袂を分かった。追悼文で山本は「近藤君の作品を、一々僕が点検して、而うして遠慮なく一々批評した。講義が難しいとか。程度が高すぎるとか。之歌詞は恋愛(ラブ)の字が多いとか。何とか異議を云ふ事が度々であったので、同君は自己の理想を発表するに十分ならずとして遂に去って自から理想の雑誌を発行せんと努力するに至った」という。実際、乙骨の追悼文でも、朔風は自分の音楽雑誌の創刊号のため、乙骨に原稿を依頼していた。しかし、朔風の死によって、音楽雑誌の発行は実現しなかった。

また、朔風は、訳詞で食べていたわけではなく、役所づとめに出ていた。しかし、朔風の職場は、山本の弔辞では「大蔵省翻訳課」とし、『木村熊二日記』では「農商務」(大正4年1月14日条)としていて、一致しない。しかも、『明治大正昭和官員録・職員録集成』⁽²⁴⁾によれば、「翻訳課」が置かれているのは大蔵省ではなく、外務省である。

また、『明治大正昭和官員録・職員録集成』に掲載された範囲内では、大蔵、農商務、外務の各省に「近藤逸五郎」の名を見つけることはできなかった。現時点では、朔風の勤務先と役職についてはなお不明である。

さて、朔風の死は突然であった。朔風は日頃から酒量が多く、30歳を過ぎてから急に太り出したのも関係あるかもしれないが、福井の追悼文によれば、大正4年の正月、朔風は元旦に自宅⁽²⁵⁾、3日に福井宅で福井と大いに音楽を語り、飲んだ。そして14日に朔風は死んだ。『音楽界』の訃報記事によれば、朔風は順天堂病院に入院し(福井の追悼文から推すと正月明け早々倒れたか?)、死因は面疔と肝臓炎という。1月18日に葬儀が営まれた⁽²⁶⁾。享年36歳。

最後に、追悼特集で「左前冷き胸に妻の心抱きて君は何地(いづち)ゆきたまふ」を含む朔風への挽歌10首を詠んだ妻の千穂は、夫の死後まもなく府立第四高女のある八王子に移り⁽²⁷⁾、音楽教員を続けていたらしいが、詳しい消息は不明である⁽²⁸⁾。千穂は昭和24年(1949)4月20日に死亡した⁽²⁹⁾。享年65歳。死亡時の姓は「篠原」で、恐らく、再婚していたのだろう。

むすびに

近代日本では、翻訳という作業を通じて、西洋文化の消化、吸収に努めてきたから、音楽の分野でも、語学力と詩才をもつ者が西洋歌曲の訳詞曲を作ることは十分あり得た。しかし、歌唱に関しては、近代日本は、「外国語の歌を原語でうたうのは声楽家という芸術家で、日本語の歌をわかりやすくうたうのは歌手という芸人だと、あっさり考えられていた時代」(「原語でうたえば、それだけで、ろくにうたえていなくても尊敬された時代」⁽³⁰⁾)であった。原語歌唱が尊ばれる音楽界においては、訳詞家は、必ずしも高く評価されなかった。

しかし、訳詞家の中でも、ヴェルディ「女心の歌」(風の中の羽のように)の堀内敬三は、音楽ジャーナリズムの世界で長年活躍したうえで、自ら訳詞集を出版した⁽³¹⁾。モーツァルト「すみれ」

(牧場の片かげひととさびしく)の乙骨三郎は、東京音楽学校教授を勤めた音楽学者の功績があり、伝記と訳詞も含めた業績が調査されている⁽³²⁾。ヘイス「故郷の廃家」(幾とせふるさと来てみれば)の犬童球溪は、故郷熊本県で長年音楽教員を勤めあげたので、教え子たちが師の引退記念として訳詞索引を作った⁽³³⁾。ショパン「鏡影」(年頃手馴れし我が鏡よ)の前田純孝は、もともと明星派の歌人なので、作歌活動の一端として訳詞も理解されている⁽³⁴⁾。彼らから推すと、音楽業界や音楽教育界の仕事をしなが、あるいは文芸結社に所属して詩歌の他に訳詞もするのではなく、訳詞を本分とし、しかも訳詞集も出さずに急逝した朔風を、ともかくも今日まで埋もれさせなかったのは、朔風の訳詞曲を愛して歌い継いできた大衆ではなかったろうか。

それにしても、今回の調査で、全部で47曲の訳詞曲を確認できた。大正4年(1915)の朔風没年までの出版物から確認した訳詞曲40曲、朔風没後の出版物から確認した訳詞曲7曲、合計47曲である。朔風が訳詞した曲の作曲家は、グルック(1714-1787)、マルティーニ(1741-1816)、ライヒャルト(1752-1814)、ベートーヴェン(1770-1827)、クローツァー(1780-1849)、ウェーバー(1786-1826)、クーラウ(1786-1832)、ジルヒャー(1789-1860)、シューベルト(1797-1828)、ベイラー(1797-1839)、ウェルナー(1800-1833)、メンデルスゾーン(1809-1847)、¹ショパン(1810-1849)、シューマン(1810-1856)、リスト(1811-1886)、ナイト(1812-1887)、ワーグナー(1813-1883)、ライトン(1816-1880)、グノー(1818-1893)、アプト(1819-1885)、ゴダー(1849-1895)、ロック(不明)、以上22人にも及ぶ。その他、スウェーデン民謡、ハンガリー民謡、ロシア民謡、ドイツ民謡が1曲ずつある。

それでは、朔風は訳詞を作るとき、どのような観点から選曲したのだろうか。朔風が訳詞をした曲の作曲家で目立つのは、メンデルスゾーンの7曲(わかれ、船路2曲、花の少女、願いごと、歌の翼、鶯)、シューベルトの5曲(ねむれねむれ=子守歌、海のしつけさ、菩提樹、春にまつ、のぼら。「終焉」はシューベルトの作曲が疑問視されているのでぞく)、シューマンの5曲(わすれ

な草、花乙女、わかみどり、蓮の花、暗路)である。ワーグナーは意外と少なく2曲(宵星、つむぎうた)、それ以外の作曲家は1曲ずつである。次に、訳詞をした曲の詩人は、ハイネとゲーテが突出しているのに気づく。ハイネは、ジルヒャー「ローレライ」、メンデルスゾーン「船路」(op.50-4と作品番号なしの2曲)、「花の少女」、「願いごと」、「歌の翼」、シューマン「わすれな草」、「花乙女」、「蓮の花」、リスト「花かそもなれ」、以上10曲の原詞の作者である。ゲーテは、ライヒャルト「野路」、シューベルト「海のしつけさ」、「菩提樹」、「のぼら」(初出は明治40年10月以前の「独唱・合唱西欧名曲」シリーズの「野薔薇の花」と思われるが未見)、ウェルナー「野中の薔薇」、メンデルスゾーン「鶯」、以上6曲の原詞の作者である。シューベルト、メンデルスゾーン、シューマンの訳詞曲数が他の作曲家に比べて多いのは、彼らが積極的にハイネやゲーテの詩に曲をつけているからではないだろうか。

また、朔風は、いわゆる大作家の歌曲から、朔風が手がけなければ、日本人は恐らくその存在も知ることはなかったような小作家の歌曲まで訳している。朔風の多彩な選曲は、何に由来するのだろうか。何か種本を用いたのではないか。

試みに、朔風が編集した『女声唱歌』はすべて女声3部合唱曲であることから、ペーター版女声用『リーダーシャッツ』⁽³⁵⁾(全100曲)の中から、朔風が訳した曲が何曲あるか調べてみたところ、次の12曲あった。()内の数字は『リーダーシャッツ』の曲番号である。

- ①(11) Die Ehre Gottes aus der Natur
(Beethoven)
→「霊異」別題「稜威」
- ②(36b) Der Soldat(Silcher)
→「つはもの」別題「胸のたゞなか」
- ③(69) Die Kapelle(Kreutzer)
→「神殿」
- ④(73) Abendlied(Kuhlau)
→「夜の歌」別題「黄昏」
- ⑤(79) Auf dem Wasser(Weber)
→「ふなうた」

- ⑥(80) Die Loreley(Silcher)
→「ローレイ」
- ⑦(82) Der Lindenbaum(Schubert)
→「菩提樹」
- ⑧(83) Der Hirt(スウェーデン民謡)
→「草笛」別題「牧童」
- ⑨(88a)Heidenröslein(Schubert)
→「野薔薇の花」(シューベルトののぼら)
- ⑩(88b)Heidenröslein(Werner)
→「野中の薔薇」別題「折薔薇」(ウェルナーののぼら)
- ⑪(91) Erstes Grün(Schumann)
→「わかみどり」別題「新緑」
- ⑫(92) Gottes Rath und Scheiden(Mendelssohn)
→「わかれ」

上記は、朔風の選曲眼の良さを改めて示すだろう。もちろん、朔風が『リーダーシャッツ』を見たという確証はないが、朔風の訳詞には、朔風の個人的な好みだけでなく、西洋で出版された愛好家向けの独唱・合唱曲集を取り寄せて選曲した可能性は高いと思う。

朔風ほどの音楽的素養と語学力があれば、訳詞から手を広げ、音楽書の翻訳を本業とすることも不可能ではなかったはずである。しかし、朔風は、あくまでも歌うための歌詞を訳すことにこだわった。音楽家を志して東京音楽学校に入りながら、歌うには不適な声のために挫折した経験は、後年の訳詞業に抜き難く影響しているのではないだろうか。朔風の絶筆はメンデルスゾーンの「歌の翼」(歌の翼に乗せて行かな)であるが、朔風の訳詞業は、自分の声では表現できずに閉じ込めた歌ごころを、大衆の声に託して解き放つ行為だったように思われる。

注.

- (1) 音楽事典や文学事典から「近藤朔風」の項目をあげる。

『音楽事典』第2巻 下中邦彦編集兼発行 平凡社 東京 1959年 1075-76頁 執筆者名なし

『標準音楽辞典』浅香淳編集兼発行音楽之友社 東京 1966年 409頁 執筆者名なし

『日本近代文学大事典』第2巻 小田切進、日本近代文学館編 講談社 東京 1977年 63頁 藤田圭雄執筆

『大日本百科全書』9 相賀徹夫編集兼出版 小学館 東京 1986年 738頁 川口明子執筆

『児童文学事典』日本児童文学学会編 東京書籍 1988年 287頁 佐藤光一執筆

- (2) 島崎篤子「訳詞における美の喪失 [I]- 歌曲《野ばら》の思想的背景に関する一考察-」, 「訳詞における美の喪失 [II]- 作曲技法上並びに訳詞に関する一考察」『福井大学教育学部紀要第IV部 芸術・体育学 音楽編』第25号 1993年3月 19-27頁, 同第29号 1995年3月 1-15頁

- (3) 『音楽界』は楽界社より明治41年から大正12年まで刊行。本稿では『音楽界』復刻版(大空社 東京 1995~1996年)を使用する。

- (4) 追悼特集の内容は次のとおり。

山本正夫「畏友故近藤逸五郎君を弔す」(甲辞) 1-3頁

乙骨三郎「近藤君の長逝を悼む」 3-4頁

前田林外「近藤逸五郎君を憶ふ」 4-6頁

小松玉巖「近藤君を憶ふ」 6-8頁

山本正夫「思ひ出のかずかず」 8-11頁

福井直秋「嗟近藤逸五郎君」 11-12頁

近藤千穂子「死別(十首)」 12頁

- (5) 桜井一族については、出石町史編集委員会編『出石町史』第2巻(通史編下) 出石町(兵庫県) 1991年 456-466頁, 473-474頁, 493-494頁参照。

- (6) 桜井勉については、長池敏弘「桜井勉の生涯とその事蹟 1~4, 補遺」がある。『林業経済』1974年1月号 28-38頁, 同3月号 7-19, 24頁, 同4月号 18-36頁, 同7月号 17-30頁, 同11月号26-30頁

- (7) 出石町教育委員会社会教育課のご指示による。なお、朔風は養子縁組に伴って出石町から除籍になっている。

- (8) 木村熊二『木村熊二日記』東京女子大学附

- 属比較文化研究所 東京 1981年
- (9) 明治女学校については、青山なを『明治女学校の研究』参照。慶応通信 東京 1970年
- (10) 巖本捷治は明治34年7月に東京音楽学校教師範部を卒業し、翌年に明治女学校教員になっている。東京音楽学校編、発行『東京音楽学校一覽』卒業生名簿による。東京芸術大学附属図書館所蔵
- (11) 朔風の小学校は、郁文館学園総合学習センター濱野政子氏のご教示で郁文館の学籍簿の記載による。ただし、東京都文京区立誠之小学校教頭高田純子氏のご教示では、卒業生台帳に「近藤逸五郎」または「桜井逸五郎」の名は見当たらないとのことであった。
- (12) 郁文館学園総合学習センター濱野政子氏のご教示による。
- (13) 中村洪介『西洋の音、日本の耳』春秋社 東京 1987年 473-531頁参照。
- (14) 『東京音楽学校一覽』の生徒名簿による。
- (15) 東京外国語大学教務課のご教示による。
- (16) 「東京日日新聞」明治35年4月23日の記事。国立国会図書館蔵マイクロフィルム使用。
- (17) 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第1巻 音楽之友社 東京 1987年 541-554頁
- (18) 参考までに、朔風が『太陽』に発表した「歌劇タンホイゼル」について、乙骨三郎は追悼文で「當時に於ては偉いものである」という言い方をしている。
- (19) 『近代日本文学事典』第4巻「白百合」(勝山功執筆)の項目参照。小田切進、日本近代文学館編 講談社 東京 1977年 182-183頁のうち183頁
- (20) 近藤(旧姓日下部)千穂の履歴については、山形県立鶴岡北高等学校長佐藤尚氏のご教示を得た。
- (21) 『東京音楽学校一覽』の卒業生名簿でも、明治39年度(明治39年10月30日時点の調査分)から、「近藤(元日下部)千穂」となっている。
- (22) 堀内敬三『堀内敬三訳詞集 夢に見る君』序文「初めての訳詞曲集に」より。音楽之友社 東京 1982年 4頁
- (23) 堀内敬三『デント以来』アオイ書房 1935年/音楽之友社 1977年(復刻) 172頁
- (24) 『明治大正昭和官員録・職員録集成』マイクロフィルム版 国立国会図書館 東京 1990年
- (25) 『音楽界』第6巻第12号「楽人動静」欄によれば、朔風は「小石川区(現在東京都文京区)丸山町17番地に転宅」とある。大正2年12月60頁
- (26) 『音楽界』第160号「楽人動静」欄 大正4年2月 61頁
- (27) 『音楽界』第161号「楽人動静」欄 大正4年3月 81頁
- (28) 『東京音楽学校一覽』では、近藤千穂は、大正8年度までは「東京府立第四高等女学校教諭」であったことが確認できる。以後は卒業生の勤務先を掲載していないので不明。
- (29) 『同声会会員名簿』東京芸術大学音楽学部同声会 1986年 377頁 東京芸術大学附属図書館所蔵
- (30) 宮沢縦一『明治は生きている』音楽之友社 東京 1965年 272頁
- (31) 堀内敬三『堀内敬三訳詞集 夢に見る君』注(22)前掲書
- (32) 赤松昭、森輝代「乙骨三郎」昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書第37巻』所収 昭和女子大学近代文学研究所 東京 1973年 385-422頁
- (33) 球磨音楽同好会編「犬童球溪先生作詞索引」種元勝弘『犬童球溪伝-作詞・作曲・人間像-』所収 29-54頁 種元勝弘(人吉市) 1986年
- (34) 有本俱子『つひに北を指す針 前田純孝の世界』河出書房新社 東京 1994年 67-68頁
- (35) Moritz Vogel (hg.): *Liderschatz für Frauenchor* C.F. Peters. No.2606 Leipzig 出版年記載なし